血液事業とは

「血液事業」とは、一般に、血液を提供していただける人を募集し、人の血液を採取し、血液製剤（人の血液又はこれから得られた物を有効成分とする医薬品。輸血用血液製剤と血漿（しょう）分画製剤がある。）として、治療を必要とする患者さんのため、病院等に供給する一連の事業のことをいいます。

平成 29 年度には、全国で約 473 万人（延べ数）の方々に献血に御協力いただきました。血液は、現代の科学技術をもってしても、未だ人工的に製造することができません。また、献血いただいた血液は、患者さんの治療目的に合わせた分離・加工がなされ、輸血用血液製剤や血漿（しょう）分画製剤となって治療に使われますが、輸血用血液製剤の一つである血小板製剤など、有効期間が非常に短いものもあります。こうしたことから、常に誰かの血液が必要とされています。

血液製剤は人の血液から作られるため、ウイルス等の混入による感染のリスクがあることが知られていますが、より安全性を向上させるため、様々な取組がなされています。献血いただいた血液に対して、血清学的検査や B 型肝炎ウイルス(HBV)、C 型肝炎ウイルス(HCV)及びヒト免疫不全ウイルス(HIV) の核酸増幅検査(NAT)を実施しており、また全ての製剤について白血球を除去する製造方法を導入しています。血液製剤による感染が疑われる事例が発生した場合には、遡及調査を行い、速やかに回収等の措置がとれるようにしています。

また、血液製剤は人の血液を原料としていることに鑑み、倫理性、国際的公平性等の観点から、原則として国内で行われる献血により得られた血液を原料として製造される国内自給が確保されることとされています。我が国では、供血の対価として金銭を提供することを禁

■献血の種類

献血には4つの種類があります。
献血で集められた血液は、使用目的に合った製剤となって、患者さんのもとに届きます。

全血献血

400ml 献血

200ml 献血

全血献血は、血液中全ての成分を採血する方法です。

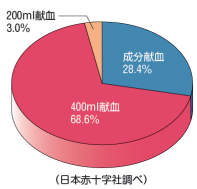
成分献血

血小板成分献血

血漿成分献血

成分献血は、成分採血装置を使用して、血小板や血漿だけを採血する方法です。体内で回復するのに時間のかかる赤血球は再び体内に戻します。

献血種類別の
献血者数の構成比（2017年）



（日本赤十字社調べ）

いのちをつな

「アンパン

りょうすけくんと妹のなっちゃん

神戸・三宮センタープラザ献血ルーム
血の様子（1月27日から「ミント神戸」1

ありがとうの気持ちがあふれ

2001年7月、りょうすけくんはこの世になりました。

この間に1度、1カ月間の外泊が許され、りょうすけくんは父と兄、妹と楽しい時間を過ごしました。抵抗力が落ちているため人ごみへの外出は厳禁。事情を察した遊園地と水族館が閉園・開館前に家族を招いてくれたこともありました。

「闘病というつらいイメージがあるけど、輸血を受けながら笑顔で過ごせたんですよね」

亡くなってからしばらく、きよみさんは何もする気が起こりませんでした。そのころの記憶さえあまり残っていないといいます。1カ月後、三宮にある献血ルームを訪れたのがはじめての外出でした。

平日の昼間。「たくさんの人が献血に来てくれている。ありがとうっていう気持ちでいっぱいになり、涙が出てきた」

当時の成分献血では両腕に針を刺されます。涙がふけません。看護師がしきりに「痛いの？大丈夫？」と気にし、涙をふいてくれました。その「輸血をしなければ国、何が起こっても不思議じゃない。でもなかった。『早く！』んや。その後は自分の力で元気になるんや」

りょうすけくんはこんなま

「なぜ、こんなにたくさんの人が献血に来てくれているのかと思った」（きよみさん）

赤血球でも有効期間は21日間。長期保存ができないため、時は何もたえられず、献血ルームにあった「メッセージノート」にその思いを残しました。

「私の4歳の長男は小児がんです。10カ月の闘病生活の末、亡くなってしまいました。その間、みなさまの献血のおかげで安心して治療を受けることができました。あの子は輸血を受けると元気になることを知っていて『アンパンマンのエキス』と言っていました。どんなに『ありがとう』と言っても足りません。今でも病院では、多くの子どもたちが献血のお世話になっています」

のブログを公開。「メッセージノート」の文章とともにその後の自身のことやこうした経緯などを紹介しました。これが人気ブログの一つになり、大きな反響を呼びました。

「『アンパンマンのエキス』は、りょうすけが『ありがとう』って言いたかったんだろうと思って書いたんです。いまでも自分が書いた気がしないんですよ」

平成19年2月1日発行
赤十字新聞から転載

テレビ新広島のHPにも、
りょうすけくんのことが
取り上げられています。

http://www.tss-tv.co.jp/news/anpan/

止し、国民のみなさんの善意による「献血」の推進を図り、国内自給の達成に取り組んでいます。

治療を必要とする全国の患者さんに必要な血液製剤を必要な時に届けることはとても重要です。

さらに、血液製剤は、献血により得られる貴重な血液を原料としていること、また、患者さんへの血液を介した感染症や副作用等を減らすため、適正な使用が求められているのです。

ここに紹介するのは、小児がんと闘った４歳の男の子のお話です。輸血用血液製剤のことを「アンパンマンのエキスだ」と言って、人から血液をもらうことに感謝し、病気と果敢に闘ったことが綴られています。

国、都道府県や市町村、採血事業者をはじめ、血液製剤の製造販売業者、製造業者、販売業者、実際に製剤を使用する医療機関、患者の方々、そして、献血に協力してくださる企業やボランティア、国民のみなさん、このように多くの人々の協力により、血液事業は成り立っています。ひとりでも多くの人を救いたい、そんなひとりひとりの思いがこれからの血液事業を発展させていくのです。

輸血を支えているのは善意の献血です

「献血してくれた人たちにありがとうの気持ちを伝えたい」と、小児がんとたたかったある男の子のお母さんが日本赤十字社の献血ルームにメッセージを残しました。病気や事故の治療に使われる血液は、献血によってまかなわれています。献血者が減少する傾向にある近年ですが、その善意がなければ、日本の医療そのものが成り立たなくなってしまうといって過言ではありません。

いだ献血

ハマンのエキス」

での成分献
5階へ移転）

過酷な治療を支えた輸血

――ある男の子の闘病記――

4歳の男の子にとって、10カ月にも及ぶ闘病生活はあまりに過酷なものでした。

りょうすけくんが神経芽細胞腫を発病したのが1999年秋。その腫瘍の大きさに細胞の組織検査をした医師も驚くほどの小児がんでした。抗がん剤治療は、りょうすけくんの体も弱らせました。起き上がれなくなるほどぐったりし、嘔吐を繰り返しました。がん細胞と同時に正常な細胞が壊れ、これが原因で死にする可能性さえありました。

その時に必要となったのが輸血でした。10カ月の間に受けた輸血は50回を超え、1回の輸血で献血者4人分の血液が必要な時もありました。

4歳の男の子はそのことの意味を理解していました。

「なんで血をえれるの」という問いに、母親のきよみさんはこんな説明をしました。

「体の中のバイ菌を殺すためにクスリが必要やろ。そのクスリはりょうすけの体も切ってしまうから、それで元気になるためにいろんな人から血をもらいと切り取れない――。壮絶な日々にもめげず、りょうすけくんは、手術を待つ間、何の治療もなしなければ一年は越せない。早ければ1、2、3日で急変することも」とまで言われました。すぐに開始された